

感情の教示文脈が表情表出に及ぼす影響

石田有馬 井 今田里佳 ○島田英昭
(信州大学)

1. 目的

表情は、感情表出の方法の一つであり、日常の社会的行動場面で重要である(Barbaraら, 2007)。

表情表出を社会的な意思伝達的手段と考えると、(1)自己が感情を適切に表現することと、(2)他者がそれを適切に評価することが必要である。本研究は、日常で感情表出する状況として、(a)特定の感情(嫌悪、喜びなど)を強く意識して表出する場合、(b)状況を認識しつつ特定の感情を意識して表出する場合、(c)状況を認識しているが特定の感情を意識せずに表出する場合という3つの文脈(教示文脈)を想定し、それぞれの文脈において表出された表情の自己評価と他者評価の違いを比較する。これにより、日常的な文脈での感情表現のプロセスを検討する。

2. 方法

課題 表情表出課題、表情自己認知課題、表情他者認知課題の3つを実施した。

材料 感情を想起させる状況文(たとえば「可愛がっていたペットが死んでしまいました」)の作成を行った。起こりうる感情想起状況を考慮し、6感情についてそれぞれ10の状況文を作成した。ここで言う6感情とは、Fridlund, Ekman & Oster (1987)が指摘した5感情(怒り、嫌悪、喜び、悲しみ、恐れ・驚き)に対して、恐れと驚きを区別して6種としたものである。大学生50名(男性30名、女性20名)に対して、8割以上の人々が特定の感情として同定した状況文を使用した。

被験者 表情表出課題および表情自己認知課題には、地方大学大学生及び大学院生50名(男性28名、女性22名、平均21.7歳)が参加した。表情他者認知課題には、表情表出課題に参加していない地方大学大学生及び大学院生100名(男性58名、女性42名)が参加した。

手続き まず、表情表出課題を実施した。iMacをRealBasicによって制御し、内蔵カメラおよび写真撮影ソフトにより、被験者が表出した表情を撮影した。最初に、感情語条件(「怒りの表情」など、特定の表情表出が求められた)を6感情について

実施した。次に、感情語+状況文条件(状況文とともに特定の感情の表情表出が求められた)および状況文条件(状況文のみ提示され表情表出が求められた)を、6感情について実施した。

次に、表情自己認知課題として、表出課題で撮影した自己の写真を提示し、6つの感情語から適切なものを選択するように求めた。最後に、表情他者認知課題として、表出課題で撮影した写真を評価用紙に印刷して提示し、6つの感情語から適切なものを選択するように求めた。

3. 結果と考察

図1に、各教示文脈における表情自己認知課題と表情他者認知課題の正答率(表情表出課題の感情との一致率)を示す。分散分析の結果、表情自己認知課題においては教示文脈の効果が見られなかったが、表情他者認知課題においては教示文脈の効果が見られた($F(2,98)=18.10, p<.01$)。LSD法による多重比較($p<.05$)の結果、直接教示条件の正答率が他の条件に比較して有意に高かった。

以上の結果は、状況文が存在することによって表出者固有の解釈に基づく表情表出の度合いが大きくなり、結果として表出の個人差が大きくなり、他者と共有された表情表出ができなくなると解釈できる。一方、特定の感情のみを強く意識すれば、他者と共有された表情表出が促進されると考えられる。この考えに従えば、表情による感情伝達をする際には、表出する感情の種類を強く意識することが、正確な伝達の条件であると考えられる。

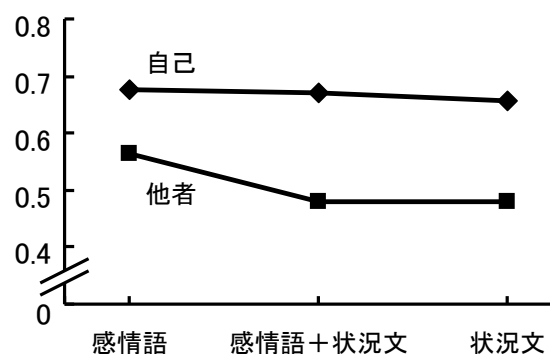


図1 各教示文脈における正答率